

花軍

前

ワキ 都の者

ツレ二人 同行者

シテ 伏見の里人（実は女郎花の精）

後

ツレ数人 草花の精

牡丹 牡丹の精

シテ 菊の精

地は 山城伏見

季は 秋九月

ワキ、ツレ三人
次第 「野沢いくへの山かけて。く。千草の花を尋ねん。

ワキ詞 「是は都方に住居する者にて候。さても洛陽に於て。

遊樂の瓊筵つきせぬ中に。殊にもてあそび候ふは

花の会にて候。今日は伏見の深草に分け入り。草

花を尋ねばやと思ひ候。

サシ 「面白や実に一年の詠めにも。皆草木の花に知る。

三人 「名残を思ふ心の末。山路幾野に行きかふ色の。こ

や九重の情なる。

下歌 「立ち居る雲も遠近の。はや秋深き夕時雨。

上歌 「濡れつゝも。鶉なくなる深草や。く。誰を忍ぶ

の浅茅原。げに住み捨てし故郷の。野となりてし

も露しげき。草のはつかに暮れ残る。伏見の沢田

水白く。薄霧迷ふ夕べかな。

ワキ詞 「急ぎ候ふほどに。伏見の里に着きて候。やがて草

花を尋ねばやと存じ候。

シテ詞 「なふくあれなる人々。見奉れば都人と見えさせ

給ふが。草花をめされ候ふは。いかさま此ほども
てあそび給ふ。下草を尋ね給ふやらん。

ワキ詞

「実によく御覧ぜられて候。さやうの為に人を誘
ひ。唯今こゝに來りたり。処の人にてましまさば。
花のあるべき処をも委しく教へてたび給へ。

シテ

「先づ此伏見の菊の花は。翁草とて名草なり。其外
おほき草花なれば。此方へ入らせ給へとて。

ワキ

「人の心も花染の。

シテ

「うつろふ姿も色ふかき。

ワキ

「日もくれなるの。

シテ

「山陰に。

地

「それぞとばかり心あてに。折らばや折らん初霜の。
置きまどはせる白菊の。花も色そふ夕暮に。猶露
しげき野分かな。く。

シテ詞

「いかに申し候。此花どもを召され候はゞ。先づ女
郎花を手折り給へ。

ワキ詞

「是は不思議の仰せかな。処の名草白菊をこそ。先々折るべきことわりなれ。女郎花を手折れとは思ひもよらぬ御事なり。」

シテ

「よし／＼承引し給はずは。女郎花に値遇の花をかたらひ。夢中にまみえ花軍を。はじめて白菊うち散らし。恨みのほどを晴らさんと。」

地

「くねる姿は女郎花。かりにあらはれ來りたり。今宵の月に待ち給へと。夕暮の花の陰に。立ちより

ツレ一同一声

て失せにけり。立ちよると見えて失せにけり。(中人)
「思ひ出づる身は深草の秋の露。ちるともよしや吉野山。」

牡丹

「さても草花の大將に。牡丹は情もふかみ草。浅からざりし花の名の。真先かけて咲き乱れ。」

地

「さて其外の草花の精。／＼。四季をり／＼の時を得て。数をつくせる花の顔。乱れあひたる花軍。風にたゞよふ有様かな。其時笹の内よりも。姿も

かゝやく天つ星。照りかゝやける光の内に。白髪
の老人頭はれたり。

後ジテ
「そもく是は。伏見の翁草とて。幾年経たる白菊
なり。

地
「実にも心は若草の。位を争ふ花軍。ことわりなれ
ども翁にゆるし。たがひの軍をやめつべしと。夕
日も輝く久方の。雲間の星の光を添へて。菊の盃
とりぐなり。

地
「花の和睦をなし給ひ。く。勇み悦ぶ草花の心。
千代のためしは山人の。折る袖匂ふ菊の露。花鳥
の戯むれ。翁は弱々と立ちあがり。伏見の竹の直
なる御代に。千草の花を押し分けて朝の。露より
此夜は明けにけり。